ジュニア防災リーダーの養成

～災害に備え生きる力と守る力を養う～

臼杵市立東中学校

１　取組事例

本年度、臼杵市では中学生を対象に「ジュニア防災リーダー養成講座」が開講された。本校からは、キャリア教育の一環として消防署で職場体験をするようにしていた５名の生徒が受講した。５名はジュニア防災リーダーとして、平成２７年１１月１日に行われた臼杵市一斉総合防災訓練に参加した。

（１）避難所運営補助

臼杵市一斉総合防災訓練での避難所運営に際して、避難をしてきた方への誘導や食料品の配布の補助を行った。また、その後に開催された講演会の受付の補助を行った。

（２）各ブースの補助

避難訓練終了後、各ブースで体験コーナーが開かれた。地域の人や福良ケ丘小学校の子どもたちに三角巾の使い方や簡易担架の作り方を教えた。

また、地震体験車「ユレルンダー」の体験コーナーでは、順番を待ちの人の整理行った。

（３）学校での活動

１０月の全校集会では、全校生徒の前で簡易担架作りを披露した。

また、３月１１日に実施された、近隣の２つの幼稚園、小学校、中央地区の住民との合同避難訓練の際にも、ジュニア防災リーダーの５名は、簡易担架の作り方を紹介した。

２　連携の取り方

（１）ジュニア防災リーダーとは

「災害に備え生きる力と守る力を養う」ことを目的に、臼杵市防災危機管理室、教育委員会学校教育課及び消防署総務課の共催で、中学生を対象として募集した本年度初めての試みである。

（２）ジュニア防災リーダー養成講座カリキュラム

《１日目》８月２６日（水）　　会　場：消防庁舎（３階　研修室）

時間	内　容	講　師	概　要
08:30	受付	防災危機管理室	
08:50	開講式	教育委員会	挨拶、紹介
09:00	オリエンテーション	防災危機管理室	自己紹介等
09:10	講座①	歴史資料館長	臼杵市の災害史
10:00	講座② （シェイクアウト訓練）	防災危機管理室	実技、地震・津波、風水害
10:40	講座③	消防団長	消防団活動について
11:20	講座④	女性防災士会長	地域で取り組む防災活動
12:00	ワークシート（振り返り）	防災危機管理室	

座学

開講式【進行：臼杵市教育委員会指導主事】

来賓　教育長（あいさつ)、総務部長、消防長

講師紹介【消防署：総括課長代理】

・オリエンテーション　臼杵市教育委員会指導主事

・講座①　文化・文化財課館長

・講座②　防災危機管理室副主幹

・講座③　臼杵市連合消防団消防団長

・講座④　うすき女性防災士連絡協議会長

振り返り【臼杵市教育委員会指導主事】

《２日目》８月２７日（木）　　会　場：消防庁舎（３階　研修室）

時間	内　容	講　師	概　要
08:45	受付	防災危機管理室	
09:00	グループワーク （臼杵高校との連携）	大分大学工学部准教授 補助・ゼミ学生	図上訓練等
10:00			
11:00			
12:00	ワークシート（振り返り）	防災危機管理室	

グループワーク

講師紹介【防災危機管理室副主幹】

・講師　大分大学工学部准教授　ゼミ学生

振り返り【臼杵市教育委員会指導主事】

《３日目》８月２８日（金）　　会　場：消防庁舎、防災拠点施設多目的グラウンド

時間	内　容	講　師	概　要
08:45	受付	防災危機管理室	
09:00	実技	防災危機管理室	応急担架、応急手当等
10:00	火災・消火器・地震体験 予行演習	消防署 防災危機管理室	煙・てんぷら火災体験、 消火器、地震体験
11:30	総合演習	危管室、教委、消防	実践型総合訓練

12:00	閉講式	教育委員会	認定証授与、記念撮影
12:15	昼食（災害時の炊出し）	防災危機管理室	アルファ米等
12:45	ワークシート（振り返り）	防災危機管理室	

実技（２班に分けて実施）

講師紹介【防災危機管理室長代理】

・実技　防災危機管理室副主幹

・煙、火災、地震体験　消防署総括課長代理

・器具取扱い　消防署士長

・総合演習　防災危機管理室長

閉講式【臼杵市教育委員会指導主事】

来賓　副市長（あいさつ、認定証授与）、教育長、総務部長、消防長

・炊出し訓練　防災危機管理室副主幹

振り返り【臼杵市教育委員会指導主事】

３　まとめ

本講座には、東中学校から５名の生徒が参加した。初日は、座学ということもあり、あまり意欲的な姿が見られなかったが、２日目に、臼杵高校の生徒が図上訓練のワークショップに参加してくれ、高校生が上手にリードしてくれたこともあり、意欲的に活動する姿が見られた。

最終日は、総合訓練であり、仲間と互いに助け合いながら、ゴールまでたどり着こうとする姿が印象的であった。その中で、いざという時に自分たちだけで物事を解決するのではなく、助けを求めること、また、協力することを通して、少しずつではあるが共助の意識の芽生えにつながったと考えられる。

３月１１日の合同避難訓練の際にも、講座で身につけたことや日ごろからの非常時に対する準備の大切さを子どもたちや地域の方々に積極的に発信することができた。

課題として、臼杵市で展開している小中一体教育[*1]の中での活用及び来年度ジュニア防災リーダーとなる後輩（本年度中学１年生）との連携があげられる。中学生にしかできない、中学生だからこそできる防災のリーダーとしての姿や具体的な取り組みを模索し、具現化していかなければならない。

＊１　小中一体教育とは、中学校ブロックごとに小中学校が共通の目標を設定し、学力向上部会、特別支援教育部会、人権・同和教育部会の３つの部会を通して連携を図る臼杵市教育委員会が提唱している仕組みのこと。

実践委員会、防災キャンプを通した地域連携の取組

佐伯市立東雲小学校、佐伯市立東雲中学校

1　取組事例

（１）実践委員会

以下の学校、ＰＴＡ、地域の関係者による防災教育に係る実践委員会を組織し、両校の取組について協議し、意見交換を行う場として、年３回実施した。

＜実践委員＞

・　学校防災アドバイザー（大学准教授）	・　県教委防災教育担当課指導主事
・　上浦地区自治委員会代表	・　上浦地区防災担当（振興局職員）
・　消防署代表	・　警察署代表
・　中学校ＰＴＡ会長	・　小学校ＰＴＡ会長
・　中学校校長	・　中学校教頭
・　中学校研究主任	・　中学校防災担当
・　小学校校長	・　小学校教頭
・　小学校研究主任	・　小学校防災担当
・　佐伯市教育委員会社会教育課担当	・　佐伯市教育委員会学校教育課長
・　学校教育課課長補佐（事務局）	・　学校教育課指導主事（事務局）　２０名

○　第１回実践委員会（平成２７年５月２６日実施）

・事業概要説明　・研究内容説明　・アンケート結果解説　・幼小中合同避難訓練評価

○　第２回実践委員会（平成２７年１０月８日実施）

・被災地研修報告　・防災キャンプふりかえり　・公開研究発表会打ち合わせ

○　第３回実践委員会（平成２８年１月１４日実施）

・年間活動の成果と課題分析　・今後の取組の方向性についての協議

【自治委員会会長から】

【防災教育アドバイザーから】

（２）防災キャンプ

平成２７年９月２６日（土)、地域や関係団体の協力を得て、小・中合同の防災キャンプを行った。 当日は、避難訓練から避難地運営訓練として、バケツリレーによる水の確保や仮設テントづくり、ハイゼックス袋による非常食づくり、簡易トイレづくりを体験した。また、午後からは避難地から中学校までのルートを歩き、危険箇所や道幅の狭いところ等と記録し、防災マップづくりを行った。(実施要項は、「２　連携の取り方」に掲載)

【体育館から避難訓練開始】

【第２次避難場所へ】

【水の確保（バケツリレー)】

【ハイゼックス袋によるご飯づくり】

【簡易なテントづくりに挑戦】

【保護者の方からご飯と味噌汁の炊きだし】

【防災マップを指導する防災士】

【地域の危険箇所を話し合う】

２　連携の取り方

（１）実践委員会

○　防災教育の方向性や保護者や地域との連携についての協議の場として実践委員会を設定。

○　委員の選定は、教育委員会と学校で協議。委員に、学校防災アドバイザー、保護者代表としてＰＴＡ会長、地域代表として自治委員会会長、関係機関として、市防災危機管理課、佐伯警察署、佐伯市消防本部にも依頼することとした。

○　依頼については、ＰＴＡ会長、自治委員会会長は、学校から依頼。関係機関については、教育委員会から依頼し、上浦地域を管轄する部署から代表者に参加してもらった。

○　その他、県教育委員会関係者、市教育委員会学校教育課、社会教育課から参加した。

（２）防災キャンプ

教育委員会社会教育課が、平成２４年度から実施している。津波による浸水が想定される海岸部の地域において、学校、家庭、地域に呼びかけ、実行委員会を組織し、地域の実情に応じて、１日、１泊２日等のプログラムを編成し、関係機関の協力を得て、防災教育や避難所運営など、様々なプログラムに取り組んでいる。上浦地域のプログラムは以下のとおり。

＜実施要項＞

ア　期　日　　平成２７年９月２６日(土)　　※雨天決行 ／ 荒天(台風等)中止

イ　場　所　　東雲中学校体育館と周辺

ウ　参加者　　東雲小学校児童・東雲中学校生徒　　※全員参加

〔関係団体〕： 社会教育課・ＰＴＡ・婦人会・区長会・老人会・振興局

防災危機管理課・土木事務所・防災士・消防団・駐在所・社会福祉協議会

エ　日　程　　☆生徒は通常登校。朝の学活後、ライフジャケットを持って体育館へ。

８：３０～　９：００　受付…しおり配布・名札書き・班ごとに整列

９：００～　９：２０　開会式

９：２０～　９：４０　防災講話…振興局（防災士）による説明

９：５０～１０：２０　避難訓練…班ごとに避難場所まで避難　※雨天時はＤＶＤ視聴

１０：３０～１２：００　避難地…ブルーシートを利用した簡易テントづくり、

運営訓練…バケツリレーによる水確保訓練、ハイゼックス袋による

非常食づくり、簡易トイレづくり

１２：００～１２：４０　昼食…ご飯と味噌汁の支給。昼食後、小１～３年生は解散

１２：５０～１３：５０　防災マップづくり①

…班ごとに、避難地から中学校までのルートを歩きながらチェック

（写真･メモに記録）→　班ごとに別のルートで

１４：００～１５：４０　防災マップづくり②…マップ作成。完成後、グループ発表

１５：４０～　閉会式　※児童生徒代表あいさつ

☆終了後、教室でアンケート記入

オ　子どもたちの持ち物　　水筒、タオル、帽子、筆記用具、米(１合)　※体操服で登校

カ　中学校の準備物　　体育館…ホワイトボード（１）、マイク（２）、パソコン、プリンター、

パイプイス（１０）、長机（４）

避難地…パイプイス（１０）、長机（２）、デジカメ（５）、画板（１２）

３　まとめ

（１）成果

実践委員会の中で、地域の高齢化や避難路の危険性など具体的な課題を共有するとともに、防災キャンプなど具体的な取組を通して、参加者は津波避難と避難所運営などの具体的な場面を考えることができるようになり、子どもたちを支える地域全体の防災意識の高まりにつながっている。

（２）課題

○　実践委員会のような組織を今後も継続して持ち、地域の防災教育の取組について情報や意見交換を行うことが求められる。

○　学校の避難場所には、地域の方も多く避難してくることが想定される。避難物資（食料や水）の準備について、今年度結論が出なかった。このような一つ一つの課題には、関係機関が連携し、児童生徒を含めた地域住民全体がより安全・安心に避難できる体制づくりを進めることが求められる。

大雨を想定した避難訓練①

～地域住民と協力連携した避難所運営～

大分県立日田林工高等学校

１　取組事例

（１）取組の背景～平成２４年北部九州豪雨の経験～

平成２４年７月３日（火）の早朝より激しい雨が降り始め、天気予報でも「記録的な豪雨が予想される」との発表があった中、本校は１学期期末考査の２日目を迎えていた。当日は、雨のために遅刻する生徒が多くいたことから、１時間目を自習として生徒の到着を待っていた。その間にも経験したことのないような短時間豪雨が降り続き、生徒も教職員もこれは大変なことになるかもしれないと思っていた。また、遠方から通学している生徒も多く今後の生徒の下校についても検討する必要があった。

１時間目終了後、職員が集合し今後の対応について話し合っていたところ、多数の生徒が生徒棟２、３階のベランダへ出て正門付近を見ていた。何かと思い職員も顔を出したところ、そこには信じられないような光景があった。正門から川のような流れがものすごいスピードで押し寄せてきていた。あっという間に駐車場に止めている職員の車にも影響を及ぼす程度の水位となった。繰り返し放送されていた「東日本大震災」の津波の流れと同様の恐怖心を感じたが、全員何もすることができない状況であった。

この様子からすると、考えられないことだが花月川が氾濫しているに違いないと感じた。当然、学校周辺の民家もすでに床下、床上浸水が始まっており住民の方々は着の身着のままで数百名が本校体育館へ避難してきた。その後も雨は降り続いたが、１２時前後に小康状態となり生徒も保護者に確認の上安全に下校させた。その時点で校区によってはすでに川が氾濫し道路も分断されていることが確認されていたため細心の注意を払うようにも指示した。

この豪雨により本校生徒の中に、全壊２軒、床上浸水９軒、床下浸水１３軒の被害が出た。教職員も親戚関係を含めて数多く被災した。学校周辺の町内（吹上町・丸山町）の被害は目に余る状況で生徒も毎日この様子を見ていた。本校としては、すぐに「何かをしなければ」という気持ちはあったが、何をしたらよいのか見当がつかない状態であった。

（２）地域住民と連携した避難訓練

平成２７年１０月１６日（金)、「豪雨災害を想定～地域住民と協力連携～」をテーマに、本年度第２回の防災避難訓練を実施した。

訓練は、豪雨のため避難勧告が発令され、地域住民が本校体育館へ避難してきた設定で行った。本校では、対策本部を立ち上げ全校生徒・教職員に指示を出した。１階の２年生は体育館へ避難し、生徒会防災リーダー及び生徒防災委員も体育館へ移動して避難所運営スタッフとして活動した。１．３年生は教室待機、状況をみて体育館へ移動した。

２　連携の取り方

今回、本校が防災教育モデル実践校に指定されたことを受けて、学校内に実践委員会を設置し、学校が所在する近隣地域の自治会代表にも委員を委嘱した。

平成２４年の九州北部豪雨水害を経験している地域住民は各自治体（吹上町、丸山町）単位で休日を利用し独自の避難訓練は実施していた。本校体育館が地域の避難所になっていることから、第１回実践委員会において、水害に特化した防災避難訓練を地域住民と協力連携して実施することを決定した。両自治会とも非常に協力的で積極的に取組んでいただけることを確認した。

第２回の実践委員会では、これまでの教職員研修や第１回防災避難訓練（地震)、防災講習会の取組を報告した後に、第２回防災避難訓練（水害を想定し地域住民と協力した）の実施計画について検討した。

○避難勧告とともに、本校で対策本部を設定し決定事項を教職員、生徒に通達。自分の身を守ることを最優先に分担された避難所運営等に関する業務にあたる。(避難所・体育館)

○地域住民は、各自治体のマニュアルに基づく避難経路をたどり本校体育館へ避難する。

○本校生徒と地域自治体の役員と連携し、運営ボランティアとして活動する。

○非常食を体験する（各自）

３　まとめ

初めての試みで、かなりの困難を生じた。地域住民の方が、予定の時間よりも早く体育館へ集合し始めたことや、生徒と地域のリーダーとの連携がうまくいかずに混乱した。防災教育アドバイザーの助言で、生徒スタッフ及び地域リーダーに指示してもらい、今から活動する内容を確認し落ち着いた。

平日の日中にも関わらず、地域住民の方が８１名参加した。日ごろから、自治会を中心に避難訓練等を実施していることは当然だが、実際に被災した経験を持っているので、防災に対する意識が高いことがわかった。今回の訓練の反省を生かして、第３回避難訓練の内容を検討した。

生徒に対しては、「自助」「共助」についてのアンケートを実施し、前年度の「地震を想定した避難訓練」の後に実施した結果と比較した。

「自助」…自分の命を守ることについて「身の安全を確保する」、「情報を収集する」、「二次災害に注意し安全な場所へ移動する」は、ほぼ全員が昨年と同様の答えだった。

「共助」…昨年度は、「困っている人を助ける」、「周りの人と協力して助ける」などの答えが多かった。

本年度は、

- 自分の安全を確認し、周囲の状況も確認した上で協力者を探し、避難所まで誘導する。
- 避難所の中で、困っている人(身体の不自由な方、高齢者、乳幼児)を確認したら、自分から声をかける。
- 地域自治会の方と協力して、運営を手伝う。(食料・飲料水の運搬、仮設トイレの設置等)
- 避難所が、雑然となった状況だったら自分が声をかけて、みんなを落ち着かせる。
- 被災後の復興ボランティアに積極的に参加する。

など、具体的な内容が多く見られた。本年度の防災教育実践の成果ではないかと考えられる。

大雨を想定した避難訓練②

～地域住民と協力連携した避難所運営（初期対応）～

大分県立日田林工高等学校

１　取組事例

（１）公開研究発表会　〈平成２７年１２月７日（月）〉

第３回避難訓練（大雨による避難勧告発令に対応し、地域住民と協力・連携した避難所運営・初期対応）を公開研究発表会で参会者に公開した。

①　目的

《生徒》

○自らの安全確保はもとより、友人や家族、地域社会の人々の安全にも貢献する大切さについて、いっそう理解を深める。また、安全で安心な社会づくりの理解を深めるとともに、地域の安全に関する活動や災害時のボランティア活動（避難所運営）等に積極的に参加できるようにする。

《教職員》

○災害時に即した避難訓練を通して、緊急時に実践できる能力を習得する。

・教職員の自然災害など防災に対する取組の役割を明確にする。

・指揮本部の役割と権限を明確にし、緊急時に対応できる体制を確立する。

・災害時における教職員及び生徒の安否確認の方法を確立する。

・災害時に様々な情報が迅速かつ正確に、校長の元に届く情報の一元化システムを確立する。

・学校と地域の関係と支援方法を確立する。

※自治体の防災担当部局等との連携体制の構築、防災管理・組織活動を充実させる。

②　訓練参加者

・吹上町・丸山１．２丁目地域住民　８３名

・行政防災担当、地域包括支援センター担当等、関係機関職員２０名

・本校生徒４５８名（うち、避難所運営スタッフ・防災リーダー２０名）、職員５７名

（２）災害の想定

梅雨前線の影響により、本日未明よりかなりの降水量であったが、生徒登校時には小康状態の小雨となり登校に影響はなかった。山間部の生徒数名を除いて登校し、平常通り授業が実施されていた。

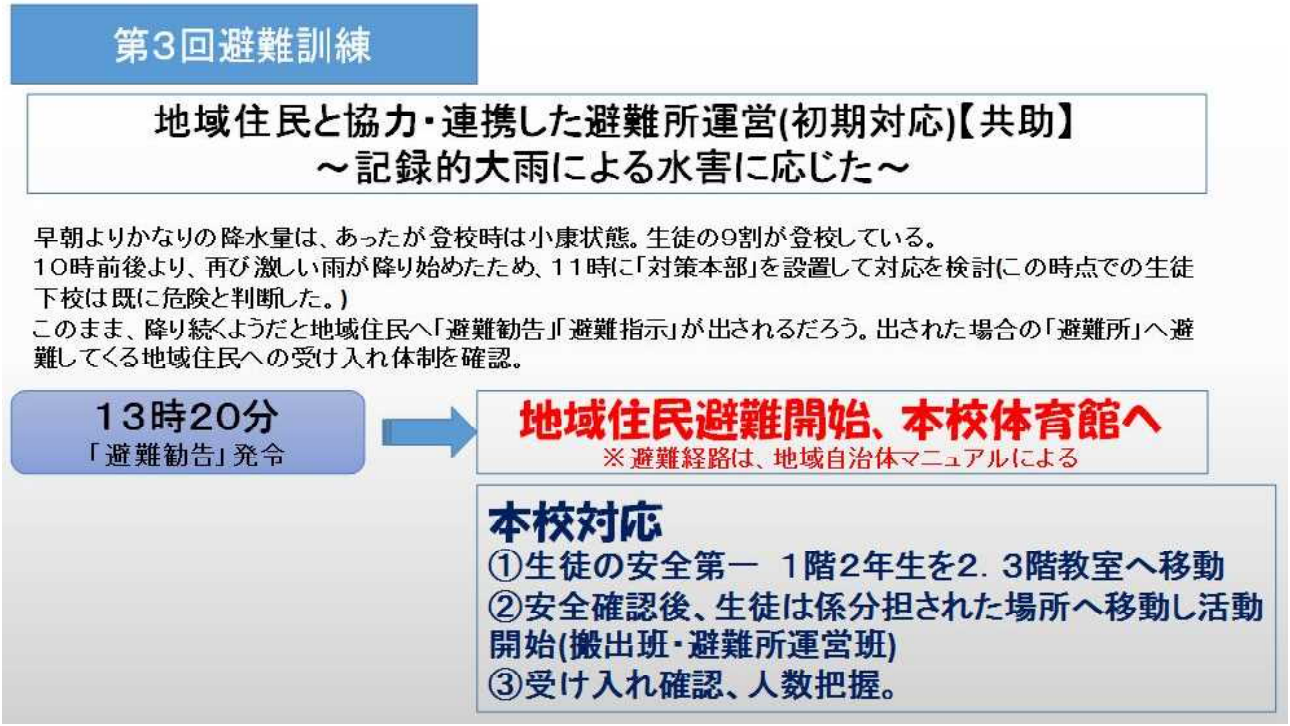
１０時００分くらいから前線の活動が活発になり、危険な状況が予想された。その後、１３時２０分に「避難勧告」が発表された。さらに「記録的短時間大雨情報」も出され花月川の氾濫の危険性が高まり、１３時４０分地域住民に「避難指示」が発令された。地域住民は、地域自治会避難マニュアルに基づき「避難勧告」が発表された時点で避難を開始した。これにより、地域住民が本校体育館に避難した。

本校では、１０時００分ころからの雨の状況また、天気予報から「避難勧告」が発令される可能性があると判断し、生徒・教職員の安全管理面を含めて１１時００分に校長室に「対策本部」を設置して対応を協議した。１３時２０分に「避難勧告」が発表されたことを受けて、本校生徒・教職員がマニュアルに従い活動を開始した。

無事、避難を完了した後にも大雨は継続し、最終的に花月川が氾濫し丸山町及び吹上町周辺も浸水した。本校舎敷地内にも浸水、周辺道路も冠水して車での移動も無理な状態となった。その後１時間程度強い雨は継続する。１６時過ぎに小康状態となる。（１６時）

生徒・住民が安全に帰宅できる状況を確認するまでに３時間程度かかった。（１９時）

１９時過ぎに、周辺道路の安全確認し自宅家族と連絡の取れた生徒から帰宅させた。



（３）役割分担と行動計画

①　本部

【対策本部確認事項】 校長・教頭・事務長・中島・木下・江田・大冨・梶原・矢野由百留・一井・池田・河上・矢野茂

※豪雨、周辺状況等を確認する。（TV、インターネット、目視）

ア：生徒職員の安全確保

★1階部分への浸水が予想されるため、指示後の本部を大職員室に移動する。

●学校本部⇒教頭(1)、事務長　　体育館本部⇒校長、教頭（１）

イ：避難指示（ＨＲ棟１階生徒・２年生）２.３階指定教室へ

Ｆ２⇒選択６、Ｍ２⇒選択４、Ｅ２⇒選択２、ＡＣ２⇒選択３➡ 確認後視聴覚教室へ

１．３年生は教室待機

※クラス担任は、担当のない副担任とともに自分のクラスへ

※生徒防災リーダーは、生徒会室に集合し役割確認、必要物品を準備し体育館へ

② 避難所関係

避難所（体育館）周辺にて、防災委員【副ルーム長・保健委員ＦＭ科・美化委員・生活委員・学校週番委員】が運営にあたる。※行政、自治会担当と協力

・避難者の点呼、確認(住民地図で避難者把握)
・避難経路への誘導、補助
・要援護者の補助、誘導
・避難所区画つくり
・掲示物等の準備

③ 管理棟・教室棟関係

ア：搬出班(管理棟１階⇒事務室・校長室・応接室・教育相談室・保健室・進路指導室)任務を遂行する。指定場所に移動し、必要な物品を大職員室、美術教室へ移動する。

※自衛防災組織に準ずる

班名	班長	場所	職員	生　徒	
搬出班	後藤寛	事務室	平川・門脇	Ｍ２【２１～３０】	Ｍ１【１５～２７】
		校長室・応接室	矢野登	Ｅ３【１５～２７】	Ｅ２【２１～３０】
		教育相談室	高瀬	Ｅ３【２８～４０】	Ｅ２【１～１０】
		保健室	一井	保健委員Ｅ・ＡＣ科	
		進路指導室	鎌手	ＡＣ３【２７～３９】	Ｆ３【２７～３９】

※保健室(救護)を２階【美術教室】へ移動する。

イ：搬出班の任務終了後、各教室にもどる。

●１１時００分　対策本部を校長室に設置し、避難勧告が発表された時の対応を協議する。

（４）日程・指示内容

★１３時２０分　避難勧告発表　（地域住民避難開始）　防災無線は使用しない

■１３時２０分　※アナウンス　河村教頭

① 教室が１階の２年生は、必要最低限の荷物を持って直ちに２.３階指定教室へ移動する。
　１．３年生【２．３階】は教室に待機。　２年担任⇒人員確認後、大職本部へ連絡
（アナウンス）

② 防災委員リーダー(生徒会役員)は、生徒会室に集合し役割確認、必要な物品を持って体育館へ移動。（アナウンス）

③ 体育館内に地域住民が避難してくるので避難所の設営、受け入れ、誘導準備を始める。

※　防災委員(副ルーム長・保健委員F、M科・美化委員、生活委員、学校週番委員)は体育館へ移動する。（アナウンス）

※　体育館指定場所へ集合し、人員把握・役割確認　誘導係はトランシーバー利用・連絡

④ 搬出班は、指定の場所へ移動して任務にあたる。（アナウンス）

⑤ 防災委員が、役割分担された係ごとに避難所運営スタッフとして活動開始する。

※　行政、地域自治体の防災スタッフとの連携

⑥避難者の状況確認、集約。係生徒の人員把握、確認。

■１３時５５分　活動終了（アナウンス）

【本校生徒・職員の役割】 吹上・丸山町自治会組織

地域住民は、自治会組織のマニュアルに従い、本校まで避難する。

■避難所運営スタッフ■

★リーダー(生徒会役員２０名・各班４名)　※教職員　本部・生徒指導部
　スタッフ(副ルーム長１２・保健委員ＦＭ１２・美化委員１２
・生活委員１２、学校週番委員２４　計７２名)合計９２名

●総務班⇒避難所の各班の活動が円滑にできるように統括**【生徒会役員】中島・坂本**

●受付・供給班⇒避難してきた方の受付確認。【副ルーム長】木下・大冨・矢野茂

【給食・給水班】　食料、飲料、救援物資、日用品の調達・配給・提供・管理
※避難者の人数把握(自治会と協力)⇒体育館本部へ報告

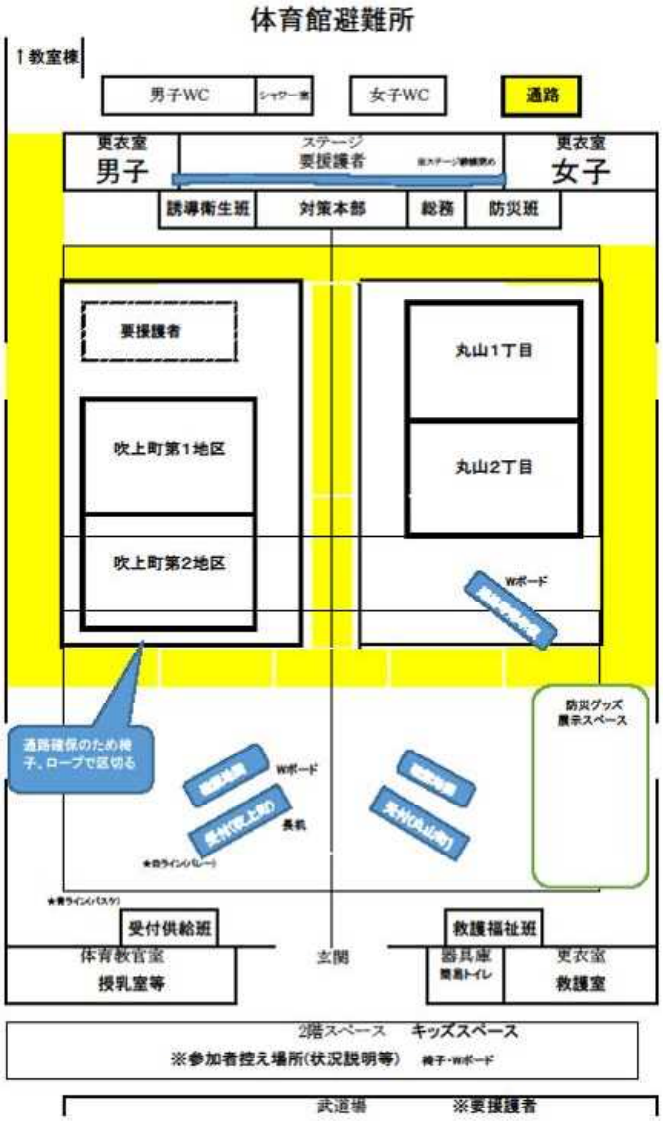
●誘導・衛生班⇒校舎敷地内で避難所(体育館)までの誘導、補助、
乗り入れ車(要援護者)の誘導
【学校週番委員】池田・河上・吉村・江藤・小野由・佐藤典・中野
避難所の巡回および危険個所対応や避難所の衛生管理

●防災班⇒避難所の区画設置、掲示物等の整備【生活委員・美化委員】矢野由・梶原

（５）活動の実際

豪雨のため、地域住民に避難勧告が発令され本校体育館避難所へ避難した。本校では、事前に避難所として地域住民の方々を受け入れる態勢を含め対策本部を立ち上げた。避難勧告が発令された後に速やかに全校生徒・教職員に指示を出した。安全を確認後、生徒が主体となって避難所に集まってくる地域住民の方への初期対応（誘導・受付・避難場所の区画つくり）に取り組んだ。

【体育館入口で避難者を誘導】



【パイプ椅子で区画を作る】

【自治会の役員と協力して受付】

【地図でどこからの避難かを確認】

【区画の椅子も避難者が利用】

２　連携の取り方

これまでに取り組んだ教職員研修や防災リーダーとしての役割確認、気象庁によるワークショップ等の取組と第２回防災避難訓練での反省事項をもとに、第３回防災避難訓練(水害を想定し地域住民と協力した)の実施計画について検討した。

その結果、以下の内容を確認した。

○訓練内容を、地域住民が避難所に集合する際の初期対応に特化した活動に決定した。

○体育館へ避難してくる地域住民が、学校敷地内に入ってからの誘導・補助(含要援護者)。体育館内での受付確認。避難所設営(掲示物・集合場所・通路設置)など。

○対策本部を、避難勧告が発表される前に設置して、地域住民が避難開始と同時に避難所運営ボランティアとして活動する。

併せて、当初１５名だった実践委員会の委員を見直し、避難の際に連携・協力が必要であると思われる包括支援センターの関係者を追加した。包括支援センターからは、避難所における要援護者を中心とした援助の手段やトイレ等の不便さなど実際の避難所生活に関係するであろう詳細な問題点等も指摘された。

その結果、災害が発生した際の自分の身を守る(自助)を確認し、避難してくる地域住民への援助(共助)として初期対応に特化した避難訓練を実施することとなった。

３　まとめ

当日は、天候も良く、地域の方々にも積極的に参加していただき、地域自治会長の尽力により、地域防災スタッフがてきぱきと指示して、本校生徒との連携もスムーズであった。

本校生徒は、２０名の生徒会役員である防災リーダーが、各クラスからの代表委員に指示して、会場設営、受付、誘導等を実施した。事前に２回リハーサルを行ってはいたが、地域住民の方々の動きが読めない部分もあって当日は臨機応変に対応していくことを確認していた。リーダーは、自分たちがやるべきことを十分に理解した上で、活動することができていたが、クラス代表のスタッフの数名の意識との間に差があり混乱を招く場面も見られた。

公開研の参加者から、以下の感想が寄せられた。

・高校生の動きがすばらしかった。
・リーダーとなる生徒が、自分のグループにしっかり指示を出し協力して活動していた。
・地域の方と自然と会話をしている姿が目についた。
・地域の方々と自然にコミュニケーションを取れることは、今日が特別ではなく日ごろから本校の活動や生徒の状況にも気にかけていただいている良好な関係を示すものではないか。

しかし、本校生徒の今回の活動状況を見る限り「もっと、考えて協力しながら活動できるのではないか」ということも言える。防災に限らず、集団で１つの目標に向かって行動・達成するためには、一人ひとりの意識を高めることが最重要課題である。達成するためには、正しい知識を身につけ明確の目標を持ち、組織的に行動することが大切である。今後の期待を含めて、もっと高い意識で活動できるよう指導していきたい。

オリジナル防災マップの作成

～「e コミマップ」を活用して～

大分県立日田林工高等学校

１　取組事例

水害対応の防災教育を推進するに当たり、過去、大きな水害に見舞われた地域へ出向くことも考えたが、平成２４年の北部九州豪雨の経験を踏まえ、被害の実態をきちんと記録することが大事で、それを地域に発信することが次の災害への備えになると考え、オリジナルの防災マップを作ることとした。

防災教育アドバイザー及び防災科学技術研究所研究員からの指導により、防災マップの作成に向けて、地域住民に当時の様子の聞き取り調査を実践した。防災リーダー２０名は２グループに分かれ、吹上町・丸山町に調査に向かった。生徒が趣旨を説明すると、いずれの住民の方々も熱心に質問に答えてくれた。

調査は、アンケートによる聞き取りを行い、画像・映像については各自のスマートフォンやデジカメで取得した。その後、そのデータを国立研究開発法人国立防災科学技術研究所提供のソフトへ入力していった。

※このマップは、URL: http://ecom-plat.jp/hitarinkou/　で視聴できます。

２　連携の取り方

（１）関係機関との連携

e コミマップ（防災マップ作成ソフト）の活用法について、「専門家を招いて指導を受けてはどうか」と防災教育アドバイザーから助言いただき、防災科学技術研究所の研究員を紹介され

日程調整を行った。研究員とは、防災教育アドバイザーに直接交渉していただき、２度にわたって茨城県つくば市から来校していただいた。

研究員からは、
①取得したデータをパソコンに取り込む方法
②画面上にデータを反映させる方法
③実際に活用できる防災ハザードマップとは何か、現地調査で聞き取った内容を踏まえて考察すること
などの指導をいただいた。

※　「e コミマップ」とは、国立研究開発法人防災科学技術研究所提供の防災マップ作成ソフトである。

（２）地域住民との連携

地域住民への聞き取り調査については、実践委員会の際に丸山町、吹上町両自治会長に依頼し日程調整を行った。両自治会ともに近日中に開催する自治会にて地域住民に周知することの了承を得た。

また、聞き取り調査の予定日が悪天候のため変更になった際も快く受諾していただいた。

【聞き取り調査】

Ａ：豪雨当時の朝、お寺の裏山から水が大量に出ていたため見に行ったそうです。すると、いつもは少し足元が緩いくらいなのに膝下まで浸かったそうです。長善寺前の道路から向こうは完全に浸水し、お寺側は山の水で浸かったけど、床上まではこなかったとお話してくれました。

　避難中、腰まで浸かりながらの移動で安全に避難できずに、避難すること自体が危なかったと言っていました。

Ｂ：　大雨が降りだして家の中に水が入ってきたとき、隣の人が戸をどんどんとたたき、危ないので避難しましょうと誘いに来てくれたので、一緒に日田林工の体育館に避難しました。その時には、膝下まで水が来ていました。

　体育館は何人かの人が来ていましたので、少し安心しました。最初、トイレのカギがかかっていましたが、後で使えるようになりましたので安心しましたが、女性用トイレが少ないので（もともと男子校だったので）混雑しました。

　避難するときには貴重品は持っていきましたが、他は何も持ち出ししませんでした。この災害を体験して今後は、携帯トイレやタオルケットのようなものを持ち出すといいのだと思いました。時間が短時間だったので、常備薬や食料などは考えていませんでしたが、今後は考えないといけませんね。

Ｃ：　大雨当日は、自宅にいたそうです。近所の方からの危ないから避難しようと言う提案から避難することになったそうです。また、避難勧告も出されていたということでした。避難場所は、日田林工の体育館。避難時の状況は足首まで水がきていたそうです。とりあえず貴重品を持って自宅を出てきました。その後、車を取りに娘さんが一度家に戻った頃には２０センチも水が増えていたそうです。また、車は助かりましたが自宅のほうは畳の上１５センチ以上、水に浸かってしまったそうです。土台の木が倒れてしまっていて今でも床はボコボコしていて気をつけながら生活されているそうです。

　この豪雨を体験してからはすぐに避難できるよう、貴重品はすぐに持ち出せるよう準

備されていると言われていました。

こちらの質問に真剣に対応していただいた。実際に被災した体験談と、今もなおその時の被害の跡が数多く残っていることに驚いた。（生徒談）

３　まとめ

調査の際に、生徒が積極的に住民の方に質問する姿は頼もしい限りであった。日ごろから、地域住民の方々とのコミュニケーションが取れていることがスムーズな調査につながったと思われる。その上で、生徒たちも地域の方々との互いに信頼関係をもって活動していくことの大切さを再確認するとともに、日常の学校生活においても地域の方と積極的に挨拶等を交わすことは必要であると感じた。

データ入力を行いＷｅｂ上にアップしたが、内容（情報量）についてはまたまだ不足している。限られた時間の中での作成となりやむを得ないところもあったが、来年度以降も継続して調査事項等を加筆していく必要がある。